2006.12.15

赤ちゃん力で子どもが変わる

下

2006.12.15

行政・学校の理解必要

活動継続へNPO奔走

もっと読みたい　はっと気付く　ほっと安らぐ

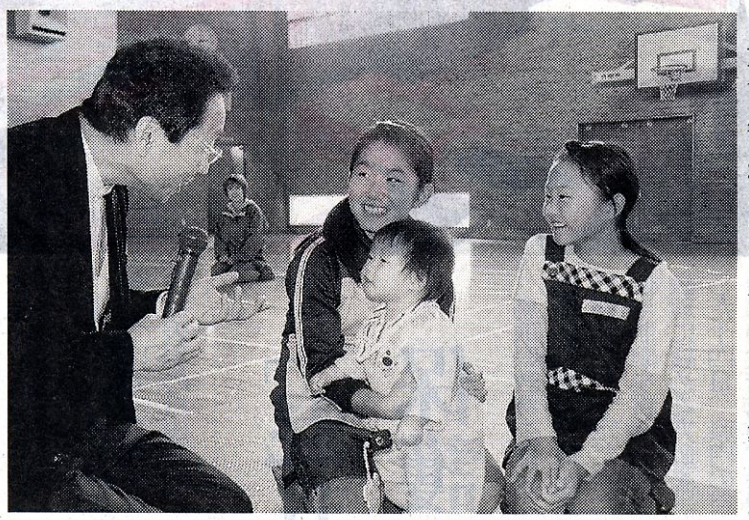
赤ちゃんとのふれあい体験の取り組みは、県内の団体や自治体へと徐々に広がりつつある。

NPO法人未来は、県の委託を受けて二〇〇六年から三カ年計画で取り組んでいる。

小児科医のため、赤ちゃん力を認識していた松田隆副理事長は、人間関係体験学習を行っていた赤碕高校が高校再編でなくなり、この取り組みが立ち消えになってはならないと同法人で継承することにした。

また、境港市や湯梨浜町では、予算化してふれあい体験学習を実施している。湯梨浜町では、〇六年度から「赤ちゃん登校日」と題して事業をスタートさせた。

同町子育て支援課の前田啓嗣課長は「少子化、核家族化が進み、人間関係も希薄な時代になってきたが、赤ちゃんとのふれあい体験はコミュニケーション力を高めてくれる」と期待。〇八年度は町内全ての小中学校で実施しており、〇九年度も継続を検討している。



高塚准教授（左）のサポートで赤ちゃんとふれあう児童＝10月、湯梨浜町の泊小学校

「愛されている」

一方、生まれたばかりの赤ちゃんが、子どもの中に入っていくことに対して批判的な意見もある。「赤ちゃんが子どもに抱かれることに果たしてメリットがあるのか」という声も聞かれる。

これに対して、鳥取大学医学部の高塚人志准教授は「ふれあいには肯定的、否定的な人もいる。しかし、デメリットが多ければここまで広がってはいない」と語る。

松田副理事長は「いろんな人と巡り合うことは、赤ちゃんにとって人間の多様性を感じるステップになる。自分は愛されているというポジティブな感情を持たせることができる」と赤ちゃんへの効果を強調する。

NPO未来では、来年度以降も継続したい考えで、各市町村の教育委員会や担当課に理解を求めていく。ただ、予算を伴うだけに、なかなか自治体の協力が得られないのが現状。学校の理解と協力も必要となってくる。

指導者育成

松田副理事長は「鳥取発の子どもの育成、子育ての新しい取り組み。自尊感情の薄い子どもが多い中、自己肯定感を持たせることにもつながる」と今後の広がりに期待する。

また、指導者の育成も急務。赤ちゃんとふれあう前には、児童、生徒への十分な説明と指導、赤ちゃんの母親に安心感を与えることが大切だが、指導者としては高塚准教授頼みといった状態だ。

同様の取り組みをしている石川県では昨年度、多くの教師や保育士が参加して指導者養成研修を開いている。

サポート体制も求められる。湯梨浜町では「赤ちゃん登校日」にファミリーサポートセンターの指導員らボランティアも登校。赤ちゃんの安全確保のほか、ふれあいがスムーズに行えるよう手助けを行っている。

「この活動はやっと今、線路が引かれたところ。あとは電車を走らせるかどうかだ」と松田副理事長は話している。